

ヨハネによる福音書11章25-26節 「よみがえりなる主」

1A 信仰こそ世の勝利

1B 疫病の中での砦

2B 旧約から新約への復活の希望

2A 兄弟ラザロの死

1B 命なるイエス

2B 肉体の復活

3B 霊の命

本文

私たちの聖書通読の学びは、ヨハネ 10 章まで来ました。そして今日は 11 章ですが、いつもは午後に一節ずつ学びますが、それは来週に持ち越したいと思います。今朝は、11 章 25-26 節に注目します。「25 イエスは彼女に言われた。「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。26 また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことはありません。あなたは、このことを信じますか。」」

私たちにとっても、初めてのオンライン礼拝になります。心は正直なところ、とても辛いです。個人的には、ロゴス・ミニストリーという聖書の学びのミニストリーを始めたのが 1999 年 7 月、けれども、主はずっと、自分に一つの思いを与えておられました。それは、神の家族でした。聖書の学びは素晴らしいですが、聖書に書かれている神の家族、キリストのからだがいかに貴いものか、その思いがずっと与えられ、教会とは概念でもなんでもなく、自分の体そのものを運び、共に同じところに集い、そこで賛美し、御言葉を聞き、聖餐にあずかる時に、確かにキリストがおられます。その臨在にあって、私たちが互いにつながり、そのつながりは家族のようなものだということです。私は、カルバリーチャペル・ロゴス東京に、そのような美しい交わりが与えられていて、主が深い慰めを与えておられました。ネットで御言葉を聞くということは、そこにも素晴らしい御霊の働きがありますが、教会に取って替えられるものでは決してありません。

ですから、正直、心は泣いています。けれども、一昨日、祈り会の時に分かち合いましたが、初代教会が必ずしも共に会うことができなかったことがあります。パウロがローマで軟禁状態になっていて、ローマ皇帝による法廷を待っていた時です。彼は、そこからエペソ人への手紙、コロサイ人へ手紙、そしてピレモンへの手紙を書きました。獄中書簡と呼ばれます。彼は物理的に、小アジアにいる兄弟姉妹と別れ離れになっても、それも自分自身を「主にある囚人」と言いました。主の御手があるとしたのです。そして、そのような物理的に離れている中にあって、教会についてあれだけ深い、霊的な姿を描いた書物はないですが、エペソ書を書いたのです。

1A 信仰こそ世の勝利

1B 疫病の中での砦

先週、教会は、疫病が流行した時に世間に立派な証しを立てていったことを話しました。ローマ時代の初代教会もそうですし、ルターの時代、ペストが流行って、その時に彼が信者たちを励ました文書も残っています。そして昨日知りましたが、驚くべき歴史の一端を知りました。ルターは、ひどいつ病にかかった時がありました。そしてその時に、ペストが大流行したのです。そしてなんと、自分のまだ幼い娘を感染症で失ってしまったのです。その他にも大切な人がどんどん死んでいきました。それでも彼は現場を離れず、人々を励ましつづけたそうです。このように、立て続けに試練が襲い、生きた心地がしなかったであろう時に、「神はわがやぐら」という、有名な讃美を書いたのだそうです。まるで、サタンが勝利しているかのような状態。人間が全く無力にされている状態。世界がコロナでめげそうになっているような状態。だからこそ、神が全能者であられ、神が私たちのために戦ってくださっているということです。

1. 神はわが砦(とりで) わが強き盾(たて)

苦しめるときの 近き助けぞ
古き悪魔 知恵を尽くし 攻め来たれば
地の誰(たれ)もが かなうこと得じ

2. いかで頼むべき わが弱き力

われらに代わりて 戦う方あり
そは誰(たれ)ぞや 万軍(ばんぐん)の主なる イエス・キリスト
勝利(しょうり)われらに 与うる神なり

3. 悪魔世に満ちて よしおどすとも

などで恐るべき 神ともにいます
この世の君 ほえたけりて 迫り来とも
主のみことば これに打ち勝つ

4. たとい主のことば 空(むな)しく見ゆとも

神は御霊(みたま)もて み旨(むね)成し遂げん
わが命も わが夫(つま)、子も とらばとりね
神の国は なおわれらにあり¹

使徒ヨハネが第一の手紙で言いました。「Iヨハ5:4-5 神から生まれた者はみな、世に勝つからです。私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝った勝利です。世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを

¹ <https://www.facebook.com/hideyokotakahashi/posts/2883296431736235>

神の御子と信じる者ではありませんか。」では、どこでこの信仰が世に勝利をもたらしているのか？御子は、死者からの復活によって、ご自身が全能者の御子であることを示されました。感染症による病どころか、死にあったとしても、それでも勝利する信仰です。

2B 旧約から新約への復活の希望

聖書は、初めから、よみがえりの希望について、それほど明確に語っていませんでした。アダムが罪を犯した時以来、人は死んで、土地に帰るものだという厳しい現実を直視する者たちになりました。ヨブが、子どもたちも家畜も、妻を除きすべてを失い、おまけに健康を失い、全く夜も眠れぬほどかゆくて、痛く来るしでいるなかで、こう叫びました。「14:14 人は死ぬと、また生きるでしょうか。」自分が死ぬことは目の前だと思って言った言葉です。ところが、苦しみ悶えながら彼は、大胆にもこう宣言します。「19:25-26 私は知っている。私を贖う方は生きておられ、ついには、土のちりの上に立たれることを。私の皮がこのように剥ぎ取られた後に、私は私の肉から神を見る。」このように、自分の肉体が滅んでも、贖い主がこの地上に来られて、その時にはわたしは復活した体から、その神を見るのだと、大胆にも宣言しているのです。

この復活信仰は、代々の預言者にも受け継がれていきます。はっきりとは語られないのですが、終わりの日にはよみがえる希望を語り始めます。詩篇交読で読みましたが、ダビデは、「16:10 あなたは、私のたましいをよみに捨て置かず、あなたにある敬虔な者に、滅びをお見せにならないのです。」と言いました。そしてイザヤは、苦難の時を予告し、こう言いました、「26:19 あなたの死人は生き返り、私の屍は、よみがえります。覚めよ、喜び歌え。土のちりの中にとどまる者よ。まことに、あなたの露は光の露。地は死者の霊を生き返らせます。」そして、ダニエルも、終わりの日、神の憤りの日に、イスラエルが救われることを預言しました。そして、こう言います。「ダニ 12:2 ちりの大地の中に眠っている者のうち、多くの者が目を覚ます。ある者は永遠のいのちに、ある者は恥辱と、永遠の嫌悪に。」

しかし、よみがえりの希望をはっきりと確信するのは、主イエスが来られてからです。主が、人の罪を根こそぎ、その流された血によって除き去り、天への希望を大きく開かれたからです。そして、ご自身が死んで、またよみがえりました。この命があるから、私たちも生きるのです。

2A 兄弟ラザロの死

ヨハネ 11 章は、主の愛されたマルタとマリア、そしてラザロの話から始まります。主はこの家族と親密な付き合いをしていました。その中の一人ラザロは、マルタとマリアの肉の兄弟で、死にかけていました。イエス様たちは、ヨルダン川の向こう側にいましたが、ベタニアからそこまで使いを送って、そのことを伝えにきました。そうしたらなんと、二日なおそこに留められたのです。すぐに出かけるのではなく、二日留まったのです。その理由をイエス様は言われます。「11:4 この病気は死で終わるものではなく、神の栄光のためのものです。それによって神の子が栄光を受けることにな

ります。」このことば、以前、主が語られたことと似ていませんか？そうです、生まれつきの盲人について、「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。この人に神のわざが現れるためです。」生まれつきに盲目で生まれたのは、神のわざが現れるためだと言われました。その災いに見えるような境遇は、神のわざが現れるためだと言われるのです。けれども、ここでは「この病気は、死にだけで終わるものではない。神の栄光が現れるためであり、しかも神の子としての栄光が現れるためだ。」というのです。

1B 命なるイエス

主は、二日待って、それからベタニアにある彼らの家に行きました。ラザロは既に死んでおり、四日も経っていました。マルタが、やってきます。「11:21 主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」少し詰っている感じの言葉です。なぜ、すぐにでも来てくださらなかったのですか？しかし、ここでイエス様が言われます。「わたしはよみがえりです。いのちです。」イエス様は、これまでも、「わたしが、それです」と言われました。モーセにかつて、「わたしは、わたしはある、という者である」と言われたとおりです。自分たちはお腹がいっぱいになりたくて、イエス様のところにやって来ていたけれども、イエス様は、「わたしがいのちのパンです。」と言われました。わたしが、あなたがたの今の必要なのだ、わたしはそれになるのだという宣言です。マルタは、模範的な、教科書的な信仰者でした、終わりの日に自分の兄弟がよみがえることは知っています、と答えていました。そう信じていたのですが、今、目の前でラザロが死んでいるという現実を突きつけられています。ある人がこう言いましたが、「私たちは過去の奇跡は信じられるし、将来の希望も信じられる。けれども、今、主がおられることに対する信仰が試される。」そうなんですね、目の前に兄弟が死んでいるという現実を突きつけられて、なおのこと、それでもイエスがここにおられると信じることは、難しいのです。

2B 肉体の復活

そしてイエス様は、「25 わたしを信じる者は死んでも生きるのです。26 また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことはありません。」と言われました。これは、どういうことか、しっかりと見る必要があります。25 節の、「死んでも生きる」というのは肉体のことです。肉体が死んでも、また肉体をもって甦るということです。この方に信頼するなら、この肉体が滅んでも、なおのこと生き返るという約束です。しかし 26 節は違います。「生きていて」というのは肉体が活着している間のことですが、その時にイエス様を信じれば、霊的に生きて、その命は肉体が滅んでも永遠に続くということです。25 節が肉体のことを指していて、26 節が霊の命のことを話しています。これを一つ一つお話していきましょう。

「いのち」と「死」というものの定義をします。みなさんは何度となく、もうお聞きになっているのでお分かりになっていると思いますが、「いのち」というのは、つながりです。結ばれていることです。ちょうど母親の胎内に子がいて、へその尾によって生きているように、いのちはつながっていること、

結ばれていることです。機械でさえが、電気機器はコンセントにつないで初めて機能します。いのちはつながることです。ですから、死とは何か分かりますね。結ばれているものが「別れる」ことです。離れてしまうことです。なので、「社会的に距離を取る」という言葉が私は、この上もなく苦々しく感じています。それは感染予防上、仕方がないことですが、社会的には死を意味します。しかし、先々週の学びでは、こういう時だからこそ主を隠れ家とすること、主を住まいとすること。本来の自分たちの姿、神の圧倒的な力強い主権の中で、一人一人が引き離されていても、それでも、ただ、この時だからこそ、主が何と語られているかを静かに聞き、その静かな声が聞こえるのではないか？ということなのです。

ともかくも、死というのは「引き離される」こと、離別することを意味します。そう考えると、肉体の死はもちろんのこと、他の意味の死も分かってきます。肉体の死とは、「自分の思いが、肉体から離れること」を意味します。魂が肉体から離れると言ってもよいでしょう。私たちが、誰かが意識を失ったといっても、その人が死んだとは言いませんね。息を引き取ったという時に、死んだと理解します。意識はなくとも、それでその人の意識がそこからなくなったわけではありません。息を引き取った時に、その人はある意味、いなくなりました。肉体はそのままそこにあるのです。けれども、その人はもういません。その「その人」とは誰でしょうか？その魂あるいは霊ですね。「伝 12:7 土のちりは元あったように地に帰り、霊はこれを与えた神に帰る。」

では、引き離されることは、何も肉体から魂だけに限りません。人が、その思いが神から引き離されていれば、それは霊において死んでいる、霊的な死であると言えます。アダムが、善悪の知識の木から実を取って食べたら、必ず死ぬと言われて、実を取って食べたら、その体は死にませんでした。しかし、そよ風が吹いていて、そこを主なる神が歩いておられたら、アダムとエバは、主の御顔を避けて、園の木の間に身を隠しました。ここです、神から自分たちの思いが離れてしまった。歩調が合わなくなってしまう。罪が神と人との仕切りとなってしまい、引き離しました。だから人は、肉体は生きていても、神に思いがいかない、御霊の事柄に思いがいかないのは、すでに死んでいるのです。「エペ 2:1-3 さて、あなたがたは自分の背きと罪の中に死んでいた者であり、かつては、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従って歩んでいました。私たちがみな、不従順の子らの中にあって、かつては自分の肉の欲のままに生き、肉と心の望むことを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。」生きているのに死んでいます。

このように霊の死もあれば、肉体の死もあります。しかし、イエス様はどちらに対しても、ご自分を信じる者に新たにいのちを与えることを約束しておられるのです。

25 節の、「わたしを信じる者は死んでも生きるのです。」ということ、つまり肉体のよみがえりのことを考えてみましょう。私たちが誰かを看取る時に、その人が死ねば、そこにその人はいないと分

かることは先にお話した通りです。つまり、その人の本質は目に見えないほうであり、肉体はその器であったことが分かります。本当のその人は霊であり、肉体は霊の器なのです。アダムが罪を犯した後に、神から離れて霊において死んでしまいましたが、また肉体も永遠に生きないようにされました。創世記 5 章には、アダムの年齢が 930 年であったことが書かれていますが、今で考えたらとてつもない長寿ですが、しかし永遠を考えると、千年に七十年が満たなかったのです。

つまり、肉体は衰えます。それはあたかも、古くなっていく着物のようでもあります。この天地があたかも着物のように、聖書は描いています。体も被造物も、古くなっていくのです。体は、「幕屋」に喩えられています。幕屋は天幕、テントのことです。一時的な住まいであり、長いこと住むことはできません。きちんと杉材で作った家に住みたいと願いますね。パウロは、今の肉体を幕屋として、そして復活の体を住まいとして喩えて、こう話しています。「Ⅱコリ 5:1-4 たとえ私たちの地上の住まいである幕屋が壊れても、私たちには天に、神が下さる建物、人の手によらない永遠の住まいがあることを、私たちは知っています。2 私たちはこの幕屋にあつてうめき、天から与えられる住まいを着たいと切望しています。3 その幕屋を脱いだとしても、私たちは裸の状態にいることはありません。4 確かにこの幕屋のうちにいる間、私たちは重荷を負ってうめいています。それは、この幕屋を脱ぎたいからではありません。死ぬはずのものが、いのちによって呑み込まれるために、天からの住まいを上に着たいからです。」いかがでしょうか、だんだん体がいたみ始める人であれば、このことを切実に願いますね。

イエス様は、おそらくはこのことを考えて、「天には住まいがある」と言われたのだと思います。「ヨハ 14:2-3 わたしの父の家には住む所がたくさんあります。そうでなかったら、あなたがたのために場所を用意しに行く、と言ったでしょうか。わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。」私たちには、生ける希望があります。それはこの肉体が減んでも、しかし天で用意されたからだがあり、イエス様が戻ってこられる時にその体を着ることになるのです。私たちがよく知る御言葉に、「国籍は天にある」がありますね。けれども、文脈を見れば、それはイエス様が戻ってくる時に、天から与えられる栄光の体、復活の体なのです。「ピリ 3:20-21 しかし、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自分に従わせることさえできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自分の栄光に輝くからだと同じ姿に変えてくださいます。」

3B 霊の命

そして、26 節、「**また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことはありません。**」を見てみます。これは、私たちはすでに、ニコデモにイエス様が語られたところで観ました。ニコデモに対してイエス様は、「新しく生まれなければいけません」と言われました。ニコデモは老齢になっているのに、また母の胎に入らないといけないのですか？と尋ねると、「人は、水と御霊に

よって生まれなければ、神の国に入ることはできません。」と言われました。つまり、「肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。」ということであり、肉体で生まれるだけでなく、御霊によっても霊が生まれないといけないということです。罪によって神から引き離され、霊が死んでしまっているところに、御霊によって再び生きて、神の子供になるのです。

そして、それは肉体が死んだとて、途絶えるものではありません。私たちは、肉体の死が近づく時に、また死ぬかもしれないという死期が近づいた時に、キリスト者はなおのこと、鮮明に主のお姿が見えてくるという証しを聞きます。それは、主とお会いできる時が近づいているからです。「ピリ 1:23 私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。そのほうが、はるかに望ましいのです。」ゆえに、私たちキリスト者は肉体の弱さから、死を恐れることもあるでしょう。しかし、本質的には恐れません。人は死ぬものであることを、キリスト者は直視することができます。むしろ、肉体以上に霊において神と交わることが大事であることを知っています。その霊の結びつき、命は肉体の死によって全く妨げられるものではないことを知っています。それから、この肉体は滅んでも、むしろキリストの栄光を反映する、新しいからだが与えられることを知っています。

だから、主の御心を行うために、死ぬことがあってもそれを厭わないのです。初代教会のキリスト者が、疫病がローマで流行しても看病し続けられたのはそのためです。ルターが、ウィッテンベルクにペストが流行っても、残された人々に励ましを与え続けられたのはそのためです。肉体の死の危険までいかなくとも、人が生きたいと願って求める安全、快適さの領域を離れても、それで主の御心を行えるのならそれでよしとすることができるのです。だからといって、主を試してはいけません。無謀であってははいけません、無謀は信仰ではないです。しかし、もし人を愛するために自分のいのちが何かがあっても、自分は自分に死ぬことによって、生きることができることを知っています。こういうわけで、キリスト者は自由があるのです。

そして、キリスト者は最も恐ろしいことが何かを知っています。「ルカ 12:5 恐れなければならぬ方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。」霊的に死んでいるならば、罪の中に生きているならば、肉体の死後に永遠に、そのまま神から離れたところにいます。神のいのちから断絶しているところに留まることとなります。これを黙示録では、「第二の死」と呼んでいます。火と硫黄の燃える池の中にある、第二の死です(21:8)。

何を恐れて、何を恐れぬのか、その区別をはっきりさせたいですね。そして、私たちに与えられた特権は、イエス様といっしょにいること、神のいのちなのだということ。肉体はとても大切な器ですが、主を試してはいけません、主の御心を行うとき、人々を愛する時に、自分の体のことは主にお任せする勇気が与えられ、自由にされます。